
フィーネ

三崎暮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィーネ

【Nコード】

N00750

【作者名】

三崎暮

【あらすじ】

愛猫フィーネの死期が近いことを告げられた恭。フィーネの死が、彼にもたらずものとは――。

医者は、ゆっくりと首を振った。

「……もう私にできることはありません。お辛いでしょうが、最期まで傍に居てあげて下さい」

目の前にいる黒猫の緑がかった眼が、俺を見上げる。

——辛くは、ない。

ただ酷く呆れるような、虚しい感じになるだけだ。

ああ、またお前らは、俺を措いていくんだなと。

「……ただいま」

玄関で靴を脱ぎながら声を出す。さっきまで律儀に俺の後ろを付いて来ていた黒猫、フイーネが重い足取りでリビングへと向かっていった。台所にいるはずの母さんの声が聞こえたから、多分そのままりビングを横切って台所に姿を現したんだろう。外の寒さにかじかむ足でフローリングの床を歩いて、自分の部屋のドアに手を掛けた時、母さんが台所から顔を出した。

「お帰り、恭。——夕飯、お父さんが帰ってきてからでもいい？」

俺は少し視線を泳がせてから、「…今日はいい」と拒否の言葉を口にした。しかし、母さんは不快な顔をするわけでもなく、ただ「あ、そう?」とだけ言っ、顔を引つ込めた。――普段なら、もう少し突っ込んで、やれ『クラブの子たちと食べてきたの?』だの『どこが悪いの?』だのと理由を聞いてくるんだろ。だが、今の母さんはそうしなかった。

……そんなに酷い顔をしていたのか、俺は。あの若者事情に疎い母さんが、異常を察知できるほどに。

カーテンを閉め切り、電気も点けていない自分の部屋は、暗かった。部屋の中に存在する物たちの輪郭が、黒い視界にうつすらと映る。照明のスイッチに指を置いてはいたが、それを押すことはなかった。部屋の状態はそのままドアを閉めると、途端に、薄暗い黒が纏わり付いてくる。

あいつも、…フィーネも今、同じような気分なのだろうか。

『死』という、暗い黒に捕われた気分。

足で体重を支えるのが億劫になって、ドアにもたれかかり、その場に座り込んだ。しばらくその状態で頭の中を空にしていると、不意にドアの向こう側から、カリカリ、と乾いた音が聞こえてきた。何も反応せずにいると、乾いた音が徐々に厚みを増して濁っていく。ガリガリ、ガリガリ。

「――あつ、こら、フィーネ! ドアで爪研ぐなって、何回言わせるの!」

濁った音を遮るように、母さんの金切り声が響いた。その瞬間に、音が止む。ドアの向こうに、感じ慣れた猫の気配がする。

「……フィーネ」

名前を呼ぶと、小さくニヤアと返事が返ってきた。俺がこんなに沈んでんだからお前も少しは悲しそうにしろよと思うくらい、陽気な猫撫で声だった。

——ふと気が付くと、朝だった。

閉め切ったカーテンの向こうから、溢れんばかりに漏れ出す光が眼を突いた。思わず目を細めて、光の少ない方へ視線を移す。その拍子に、昨日から全く変わっていない自分の格好を見て、あのままドアにもたれて寝てしまったという事実に気付いた。……ありえねえ、何がしたかったんだ、俺。

着けっ放しの腕時計を見ると、学校に行く時間はとうに過ぎていく。それどころか、多分今頃はもう2限目だ。

ドアを開けて、廊下に出る。うちは3LDKのマンションの一室で、玄関から真っ直ぐにフローリングの廊下が伸び、その先にリビングとキッチン、廊下のリビングに向かって左側に2部屋、右側に1部屋の洋室がある。一般庶民の住まいとしては、平均的レベルだと思う。兄貴が大学に行って一人暮らしを始めるまでは手狭に感じた程だったが、今では少し広すぎるくらいだ。

リビングに向かい、ふとそこにあった食卓に眼を遣ると、小さく破られたチラシの裏に、見慣れた母さんの文字があった。書いた当人は、もう仕事に行ってしまったらしい。走り書きな上に、年齢にそぐわない丸字でかなり読み辛い。

『頭痛で休むって言ってあるから、そのつもりで』

何とか全文解読すると、そのメモをごみ箱に放った。：いくら上手く隠したつもりでも、実の親にはバレるものらしい。普段はふざけた態度で接してくるくせに、こういうところできっかり『親』を全うしてくるから困る。おかげで、貴重な第二次反抗期のタイミングを逃してしまった。

そこまで考えて、いきなり空腹を思い出した。思えば、昨日の夕飯も食べてないんだっけか。

食料を漁りにキッチンに向かうと、ちょうどそれを妨げるかのように、食器棚の陰からフィーネが出てきた。年寄りらしい、変にゆっくりした足取りで、俺に近付いてくる。

「……おはよう」

俺がそう言うと、フィーネは俺の言ったことが解るとでも言うように、その尻尾を振った。いや、本当に解ってるのかもしれない。昔からコイツは、何となく不思議な雰囲気を持っていた。小動物のくせに人間の行動を理解しすぎているというか、逆を言えば——人間らしいというか。

だからこそ俺は、フィーネとアイツを——

フィーネの頭を撫でてやろうと手を伸ばすと、それが届く前に電話が鳴った。指が空中で行き場を無くす。……誰だよ、こんな時に嫌がらせか。

不本意ながら受話器を取り、だるさ満開の声で応えた。

「……はい。杉本です」

「あ、恭か。僕だけど」

久し振りに聞く兄貴の声だった。……………嫌がらせ決定。

「……………すいませんけど、ボクボク詐欺ならお断りです。切りますよ」

「何だ、その媚びた名前の詐欺。実の兄に向かって、それはないだろ」

「……………なら御名前と御用件を手短に話しやがれ、バカ兄貴」

兄貴の文句を言う声が聞こえたが、敢えて聞こえない振りを決め込む。すると兄貴は、いちいち反論していたら事が前進しないことにやっと気付いたのか、溜め息の後、

「…フィーネが、もう長くないって聞いたから」

と零しやがった。そのまま間髪入れずに、続ける。

「何の病気？」

「……………心筋症」

「病名だけ言われても判るわけないだろ」

「……………心臓の壁が厚くなって、心室や心房の隙間がなくなって、血液が送れなくなるんだと。そのせいで血栓が血管を塞いだり、循環障害になりやすいらしい。原因がはつきりとは解らないから、治療法も無い。医者にも、『もう出来ることは無い』って言われた。…まあ、元々年が年だったしな」

いくら兄貴が文系でも『心室』や『心房』くらい知ってるだろうということ为前提に、医者に言われた通りの説明をした。最後は俺の付け足しだけ。

「そうか……。原因が解らないんじゃない、どうしようもないな」

「……どの道、兄貴には何もできねえよ。心配すんな」

「まあ、確かに文学部だし。医学部なら何とかできたかもしれないけど」

兄貴が電話の向こうでハハハ、と乾いた笑い声を出す。そして、それを聞いた俺は、何故か無性に腹が立った。…兄貴はいい。今、この場にいないんだから。3年間を一緒に過ごした命が、逃げられない黒い網に捕われている姿を目の当たりにすることもない。――傍観者は、黙ってる。

そんな俺の苛立ちにも気付くことのない兄貴との会話をさっさと終わらせたくて、俺は相変わらず不機嫌な声で続ける。

「……用がそれだけならもういいだろ。切るぞ」

「…何でそんなに機嫌悪いんだ。お前がへこんでるんじゃないかと思っ、講義の合間ぬって電話してやったのに」

「……余計なお世話だっつーの。俺だって小学生のガキじゃな」

「ガキだよ」

兄貴の口調が、いきなり真剣味を帯びる。予想外のこと、俺

の方も言葉に詰まってしまった。

「お前は、ガキだ。…背とか学力とかの問題じゃなくてさ」

「……人のことガキガキ言ってるじゃねえよ」

兄貴が何を言いたいのかは解ってた。が、反論はできない。他人のことをガキと言う兄貴の行為自体を、責めることしかできなかった。

しかし、それも及ばない。

「本当にガキなんだからしょうがないだろ。……まあ、お前がどうしようとして別に構わないけど、僕にとってもフィーネは家族だ。だから、これだけは言っとく」

そして兄貴は、いつものように、解った風な口を利く。

「フィーネはフィーネ、一匹の猫だ。……他の誰かと重なるな」

衝動的に電話を切った。

予想は出来ていたのに、心臓が過度なまでに反応する。暑くもないのに汗が噴き出す。受話器を握る指の関節が白い。

——震えた。

心と身体が、全く同時に。

……何、ビビってたんだよ、俺。何を今更ビビってたんだよ。おかしいだろ。自覚あったんだろ。とっくに解ってたんだろ。何を今更。

ただのイタイ奴じゃねえかよ。おかしいって。未練がましいから。馬鹿じゃねえの。

「……………解ってんだよ、そんなことぐらい」

俺が、…俺自身が、アイツとフィーネを重ねてたことくらい。

足元でミヤア、と声がした。その声につられて視線を受話器から床にやると、フィーネの緑色の眼と目が合った。途端に、さあつと気分が楽になった。——その緑があまりに穏やかだったから、感化されたのかもしれない。

その場にしゃがんで、フィーネの頭に手を伸ばす。今度は、確かに届いた。

「フィーネ。…散歩、行くか」

にゃー、と返事が返ってきた。やっぱりコイツは、俺の言うことが解るらしい。

秋も終わりの乾いた空気が、皮膚から水分を奪っていく。時々吹き抜ける寒風が目にも痛い。何かもう一枚羽織ってくれば良かったと、ありがちな後悔をしてから、少し後ろを歩くフィーネを振り返って見た。俺の少し後ろを付いてくるフィーネは、猫らしくない平然とした顔で、悠々とアスファルトを踏み締めてやがった。…『猫はこ

たつで丸くなる』んじゃなかったのか。まあ、まだ冬というには少し早いのも事実だが。

俺は今、中学の時の通学路を歩いている。高校に入って電車通学を初めてからは滅多に通らなくなった、駅とは反対側の町並み。ビルなどの商業施設はあまりなく、主に昭和風な住宅が目につく。にも関わらず、変にばかでかい噴水のある公園があったり、夕方になるとその裏の空き地に蝙蝠の群れが出没する郵便局など、明らかに不釣り合いな建物も立ち並んでいる。午前中であることも手伝つてか、殆ど人の姿は無かった。

通らなくなつてからまだ一年も経たないのに、なぜか酷く懐かしかつた。そして同時に、虚しくもなつた。……忘れたかつたからかもしれない。アイツが最期に見たのであろうこの光景を。事実、この道を通り続けた中学の3年間は、最悪だつた。この道を通るだけで、実際には見ていないアイツの最期の顔が頭に浮かぶ。

その顔は、明らかに俺を憎んでいた。

『何でお前は生きてるんだ』

『何で自分が死ななきゃいけなかつたんだ』

そんな呪詛が耳鳴りのように響くのを必死で無視する。

『俺だつてわかんねえよ』

『何で俺が措いてかれなきゃなんねえんだよ』

そして、なんとか学校にたどり着く。毎日毎日、そんな感じだつた。

野良だったフィーネを拾ったのも、その日常の最中だった。アイツの葬式の帰り道。妙に付き纏ってくる黒猫に、最初は気分を悪くしたが、次第に親近感が湧き出した。その黒猫の人間らしいところとか、俺にはやたら懐いてくるところとか、拾った日が何の日だったかということかを全部ひっくるめて、兄貴の言うとおり、俺は間違いなくアイツとフィーネを重ねていた。そして通学路がアイツの憎しみの顔を喚起させたように、フィーネの緑色の眼も、アイツの姿を思い起こさせた。

しかし何の救いか、それはいつでも笑顔だった。

フィーネを見て思い出すアイツの顔は、笑顔のみ。何の未練も残さず逝けました、みたいな暢気な顔して、かえって俺が腹立つくらいに笑っていた。

一度だけ、無駄だと解つていながら、『俺を恨んでないのか？』と聞いてみたことがあった。緑の眼をした黒い猫に。すると猫は、俺の質問より母さんの用意したキャットフードに興味を持ち、結局何も答えなかった。——それで良かったんだ。もしフィーネが何か答えていたら、俺はとつくにおかしくなっていたに違いない。

横断歩道の信号が赤であることに気付き、足を止める。ふと視線を上げると、そこはあの交差点だった。3年前にアイツが死んだ場所。かつては、一番はつきりとアイツの呪いが聞こえた場所。……今は何も聞こえない。人の声も、車の音も。まるで此処だけが隔離された真空であるかのように、静かで、空ろだ。隣にいるフィーネの心音が聞こえてきそうなほどだった。

「——フィーネ」

視線は上げたままで、足元の黒猫を呼ぶ。返事は、ない。

「……知り合いが、此処で死んだんだ。信号無視った4トントラックに撥ねられて」

反応がないのは解ってる。それでも、言葉が止まらない。

「俺は、いつも一緒に登校してたけど、たまたまその日は寝坊して違う道から学校に行ったから、教師から聞かされるまで何も知らなかった。でも確かにアイツは死んで、いきなり何も言わなくなってる。措いていかれたんだと思った」

いなくなったアイツがどこ行っただかなんて知らねえけど、それでも俺の生きるこの世界と違う場所だっていうことは明らかで。何の言葉も、何の置き土産も無しに逝ってしまったアイツに、措いていかれたんだと思った。何も残らず、ただ穴の開いた心だけが残った。そしてフィーネもまた、俺を措いていくんだと思った。何の言葉も、何の置き土産も残さず、どこか遠くに行ってしまうんだと。アイツと、同じように。

「……でも、こんなことばっかしてるわけにもいかねえよな」

世界は進む。残酷に、非情に、アイツと俺の間に割って入る。あの時に留まることを許してはくれない。現実には引つ張られて、無理矢理にでも連れて行かれる。

フィーネは、俺にとって唯一の過去との接点だった。過去に縋れば、いつかアイツの声が聞こえなくなってしまうと思ってる。アイツの呪いから逃れたくて、フィーネをアイツに重ねて過ごしてきた。一方で、アイツの声を失いたくないと思う自分がいることも確かだった。アイツは俺の『ただ一人』で、恐らく一生、忘れることのできない存在だろうから。

だが、そうやって俺が停滞している間にも、世界は進む。

「だから、いい加減進むことにする」

その場にしゃがんで、フィーネを抱え上げた。アイツの面影を感じた緑の瞳が、不思議そうに俺を捉える。

「この交差点を見ても、もう声が聞こえない。お前の眼を見ても、もうアイツの顔は浮かばない。…だから、進まなきゃいけないんだ」

それでも俺は、これから先、アイツを忘れることなんかできない。『進む』とカッコつけて言っても、それは過去を引き摺って、過去に縋りたい自分を引き摺って、そして現実に引き摺られて前に移動する、半ば『這う』ようなものかもしれない。でも、それはそれでアリだと信じたい。

何故なら。

「俺は『措いていかれた』んじゃないんだよな。——『残された』んだ」

目の前の黒猫が鳴いた。酷く小さく、それでいてはつきりと。

……ああ、そうだ。こいつは、俺の言うことが解るんだったか。その声が肯定なら、俺はきっと、間違っていない。

腕の中の温もりが冷えていく。規則正しく伝わってきた音が消える。

交差点には、俺だけが『残された』。

知らないうちに泣いていた。外だというのに、恥も何も無いまま、

声を殺して泣き崩れた。

腕の中の命が、終わった。

それでもその終わりは、なぜか始まりに酷く似ていた。

（後書き）

作中の『心筋症』については、私がインターネット等から得た付け焼刃の知識に基づいて扱ったため、その程度の信憑性しかないということを御了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075o/>

フィーネ

2010年10月10日13時19分発行